
無敵のPIERROT

龍門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無敵のPIERROT

【Zコード】

Z4869J

【作者名】

龍門

【あらすじ】

夢と罪が集つ『島』。その『島』に名は無く。人は様々な名で呼ぶ。その中で一番多い呼び名『道化師の住む島』。

道化師は時に人を助け、人を嘲笑い、人を殺す。様々な思惑・殺意・愛憎・友情・交差する全て。道化師は何を思い何を目指すのか？

人々は口を揃えて言う。「この世に幸せはあるのか」と。

さあ、一時の夢を見よう。

さあ、今までの罪を見つめよう。

案内人は道化の男。この男、善か？悪か？

道に迷わないように目を凝らし、道化の男の奇術。『堪能あれ・・・

道化師は語る。（前書き）

道化師は語る。・・・。
物語のホンの少しを。・・・。

道化師は語る。

様々な人間がこの『島』にやつてくる。その者の多くは夢、希望、野望と言う不確かで、人が必ず抱くモノを抱いてやつて来る。

だが、そんなモノはこの『島』に足を踏み入れた瞬間に消える。そして皆、この『島』の小さな者になつてしまつ。

『島』の住民は、世間一般で言う邪魔者だ。殆どが犯罪者であり、この『島』でも様々な犯罪が起きている。

だが、起つる犯罪を一個一個対処していたらキリがない。だから些細な、他愛もない犯罪はスルーだ。勝手にどうぞ状態だ。けれども全てが全て許される訳ではない。この『島』に対しても有害とされる犯罪は罰せられる。

罰則などを決めているのは『島』の幹部達。通称『セブンズ・ツリー』。七本の樹がこの『島』の実質の頂点。

大概の人間は『セブンズ・ツリー』の誰かの名を聞けば大人しくなるが、この『島』に集う者達は皆が皆、そんな素直ではない。だが、そんな素直ではない犯罪者でもこの者の名を聞けば大人しくなる。

名は・・・『道化師』。時に人を助け。時に嘲笑い。時に殺す。自由な『道化師』は『島』を飛び回り、己の気に喰わない奴を殺す。使う力は説明不可能。摩訶不思議な力。

これ以上の説明は野暮だろう。説明何てモノは全部が全部、全ての人に理解される訳ではない。

物語の奥深くは自分で探り、自分で見つけ、自分で理解する。自己推理で物事を見て、自己推理で解決する。人の意見、説明はその者の考えのほんの一部にしかならない。理解して欲しいなどは人の傲慢でしかない。愚かで、人と一緒でないと生きていけない。

おつと、これは少々捻くれた事を言つてしまつた。

ではでは、この『島』の・・・先ほどから『島』『島』と、この

『島』の名前を言つてなかつた。だが實際、この『島』に名前何てモノは存在しない。皆が好きなように呼んでいる。だが、こつ呼ばれる事が多いでしょう。

『道化師の住む島』

それでは、この奇妙で最悪で救いのない物語の、奥深くを探つてみてください。

道化師は語る。（後書き）

何かプロローグみたいだ。いや・・・プロローグなのか・・・。これまた次まで時間あいてしまうのでしょうか。

でも面白いと思って考えた。今回はホンの少し。物語の世界観？もあまり書けなかつたからこれを読んだだけでは何が何やらですよ。書いた本人も訳が解らない状態です。てかまた内容が重くなりそうな気がする。今回のはスカツとしたバトル物ではなく、後腐れとが残るバトルが多い。でもやっぱり物語の明るい所ばかりは面白くない。だから今回は物語の裏。善人が悪人を倒して終りではなく、悪人がどう悪人を倒すか？その後に何が残るか？何て物を書けたら良いなと思っています。

頑張ります・・・。

夢と罪が集つ島で、道化師は舞つ。

前編（前書き）

久しぶりに島に現れた道化師・・・。
街は賑わい、血が流れる・・・。

夢と罪が集つ島で、道化師は舞つ。 前編

火薬の二オイは嫌いではない。だが、取り分け好きでもない。だが、こんな所に居たら、火薬の二オイを嗅がない日はない。それ程日常茶飯事に、この島では弾丸が飛び交う。

けれども、そんな環境は嫌いではない。そもそも、その元凶の殆どは私なのだから。

名が無い島。無いのには特に理由はない。各々が好きに呼び、好きに名付ければ良い。

私自身も、名にそれ程の思いはない。

「二二だ！――！」

「ぶつ殺せ！――！」

「ピエロを殺せ！――！」

あらら。野蛮な稼ぎ屋が、汚い声で叫んでいる。

ピエロ。まあ、私の事だ。

理解不能の力を使い、気まぐれで人を殺す、道化師。などと、言わ
れている。

理解不能の力を使う道化師を、何故稼ぎ屋達が追うのか？簡単に言えば私の首に賞金が懸かっているからだ。どの位だつたかは忘れたが、孫の世代まで遊んで暮らせる程の額の筈だ。よくもまあ、そんな額を私の首に懸けたものだ。懸けた理由は、

「これまた簡単。私が絶対……死なないからだ。」

「オーン。」「オーン。」「オーン……。」

島で一番高い建物の、時計台の針が12時を指した。

「さて、最高で醜悪なショーザ時間だ」

時計台の屋根の上。つまりは一番高い所から、黒いスースを着こなす男が、下を見下ろしている。

光るネオン。年中無休のお祭り騒ぎは、久し振りの真骨頂である。久し振りと言うのは、ここ最近、道化師が姿を現さなかつたからである。理由は不明。一時、死んだのではないかと噂されていたが、それもデマだつた様だ。

「ここに居ては、稼ぎ屋は私を見つける事もできないか……」

道化師は身軽に飛び降りた。そして、時計台との落差10メートル程の建物の屋根の上に着地した。普通なら即死。だが、飛び降りたのは道化師だ。そう簡単に死ぬ筈はない。

「居たぞ！ あそこだ！！」

道化師が着地した建物の向いに立っている建物の上から、ガラの悪い男がショットガンを構えながら叫んだ。その叫び声の後に、ショットガンから銃弾が飛び出した。

飛び出した銃弾は、道化師の耳擦れ擦れを通り過ぎて行く。ショットガンを撃っている男が、下手くそなのではない。むしろ巧い方だ。ただ、道化師が弾丸を避けているだけだ。

「見つけたぞ！……！」

道化師の後ろから、拳銃を撃ちながらこれまでガラの悪い男が走つて来る。

だがその弾丸も当たらない。

「クソッ！ 何で当たらねえーーー！」

拳銃を使つている方の稼ぎ屋が叫ぶ。

そう叫んでいる際にも拳銃からは弾丸は飛び出している。

「何でだと思ひつ？」

拳銃を持つてている方の男が凍り付く。田の前に立つる箸の道化師が消えた。そして何故か声が後ろから聞こえる。

今男を襲うのは恐怖のみ。

「こっちだよ。こっち」

後ろから声が聞こえる。振り向こうとも振り向けない。体が動かない。

「あれ？ もしかして怖いのかい？」

ゆつくつとした口調で聞こえる声。辛うじて声は出た。

「お、お前は……誰だ……？」
「唯一の抵抗。唯一の見栄。」

「誰だつて……やつ今まで君の前に居たじやないか……」
「恐怖。恐怖。恐怖。」

後ろに居る男は、先程まで自分の前に居た男・・・道化師・・・・・

。 拳銃を持つ男は言葉の意味を知る。『理解不能の力』つまりはこれだ。

もう拳銃を持つ男には絶望しかない。

トンツ・・・。拳銃を持つ男の後頭部に一本の指が当たる。道化師の人差し指だ。

「君は・・・ラッキーだ。私の復活最初の死者だ。だから・・・・・一瞬で終わる」

声質は明るいモノなのに、その言葉は残酷なモノだ。

拳銃を持つ男は泣く暇もなかつた。道化師は後頭部をもう一度、人差し指で突く。

男の手から拳銃が滑り落ちる。そして男は口から涎を垂れ流し、白目を剥き、息苦しそうに唸つた。そしてその場に崩れ落ちた。

これが死・・・。あまりにも惨い死に様。

道化師は落ちた拳銃を拾い、向いに居るショットガンを持つた男に、銃口を向けた。

ドオン！道化師が引き金を引いた。

道化師の持つ拳銃から飛び出した弾丸は、綺麗な弾道でショットガンを構えていた男の眉間に食い込んだ。この出来事が、ほんの数秒で起きた。

「二人目・・・」

建物の下。街の中では稼ぎ屋が叫びながらこの建物を田指している。道化師は一度唇を舐め、不敵な笑みを浮かべた・・・。

夢と罪が集つ島で、道化師は舞つ。 前編（後書き）

もう大変だ。次の話次の話と物語は膨らむが、どうも文字にする事が難しい。

書きたい事は決まっている。どんなストーリーかも決まってる。でも、中々文字にできない。葛藤です。自分の能力との。内容の解説は後編でしたいと思います。

それまでどうか、読んでください！！！！！

夢と罪が集つ島で、道化師は舞つ。 中編（前書き）

最悪紳士と殺戮神父。

最悪を振りまく紳士と人を殺す聖職者。

夢と罪が集つ島で、道化師は舞つ。 中編

「おーー・ピエロが現れたらしげぞー！」

汚らしい男が、興奮しながら自分の周りの男達に話している。

「本當か！？現れたのか？」

その話を聞いた男の一人が、これまた興奮しながら聞きなおす。

「本當だ！向こうの時計台でダンパチしているみたいだ！…見に行くぞ！」

汚らしい男が時計台の方を指差しながら言った。その言葉を待つていたかの様に、男連中は時計台に走つて行った。

「馬鹿な奴らだ・・・。見に行つて巻き込まれたらどうするんだ・・・」

屋外に置かれたテーブル、椅子。基本建物の中で食べるつて事が無い。全ての飲食店は窓も扉も壁も無い。理由は建物の中に居て、攻撃されたら気付くのが遅くなる。だそづだ。

日常ではあり得無い事だらうが、この島では当たり前だ。

そんで俺はその飲食店の一つで食事を取つてゐる訳だが・・・。

「久しぶりだな・・・」

丸いテーブルの上にある、酒の瓶を持ち、グラスに注ぐ。

この島は道化師。まあ、ピエロとも言はれてゐるが、その男が仕

切っていると言つても過言じやない。だが、仕切っていると言つてもその男は手配人。この島での手配人と言つのは危険分子とか、大悪党とかでは無い。この島に不必要の人の事を指している。道化師に懸けられている額は、この島最高額。血の気の多い馬鹿や、金に目が眩んだ馬鹿が道化師に挑み続いている。まあ、殆どが殺されているが。

「馬鹿ばっかりだ・・・」

「その通りですね」

もう一度グラスに酒を注いでいる時、目の前に黒い神父服を着た若い男が立っている。

「これは、これは。殺戮神父さんではありますか」

「こんな所で酒盛りですか？最悪紳士」

若い男。名はツイック＝ノリオン。別名、殺戮神父。名の通り聖職者のくせに人を殺している。

「俺でも飲みたい時があるんだよ！」

最悪紳士。これが俺の別名。名はハグリスト＝ネクリスタル＝オーマ。何故最悪と言う名が付いたか俺自身は解らない。ムカつく奴を、片つ端から撃つていたらこんな名前になつていた。

「で、現れたのは本当でしょうか？」

ツイックが、椅子に腰を下ろしながら聞いてきた。

「偽物でここまで盛り上らないだろ」

一口酒を飲み、時計台の方を見た。黒い煙が、黒い空に昇つている。

「3年ぶりですね」
独り言か、こっちに訪ねているのか、イマイチ解らず返答しよう
か戸惑う。

「『セブンズ・ツリー』の3本が裏切るとは思いませんでしたけど
・・・」

時計台の方を見ながらツイックが言った。『セブンズ・ツリー』
この島の大統領みたいな者だ。普通と違うのが7人居る事だ。
ツイックが言った、3本と言うのは樹の事だ。『セブンズ・ツリー』
『7本の樹。実際、樹が取り仕切つている訳ではない。七人の人間
の事を『セブンズ・ツリー』と呼んでいる。そして『セブンズ・ツ
リー』は、1本、2本と呼ばれて、役割も違う。

1本	・	罰則
2本	・	虚言
3本	・	忘却
4本	・	生殖
5本	・	情炎
6本	・	殺戮
7本	・	金円

まあ、役割と言つても大雑把なモノだ。
誰がこんなシステムを作つたかと言う・・・いや、これは今言つ
事ではないな。

「忘却だつて？新しいのが入つて無いのか？」

『セブンズ・ツリー』は、樹の一人が死んでも直ぐに新しい人間
がその地位に就く。3年前の事件で、3本の忘却が自分の役割を放
棄した。そして死んだ。いや、殺された。

「まだです。中々居ないらしいです」

時計台の方で空に上がる煙が一本増えた。

「」苦労さまだなあ

「そうですね」

ツイックの前に酒のボトルを出したが、首を横に振った。

「おじッ！ふざけるなよーイカサマしてんじゃねえよッ！..」

店の奥の方で酒に酔った男が、手に持つていてるトランプを投げながら怒鳴った。

「イカサマ？負けたからって変な言い掛けはしなでくれよ」

怒鳴った男の前に座っている、若い男は溜息を附きながら言った。

「ふざけるなよー！メローッ！ぶつ殺してやるッ！」

怒鳴る男は腰に手を回し、拳銃を抜き取ろうとした。

「フンッ。そんな怒るなよ、オッサン」

自分より年下であろう人間に馬鹿にされ、怒鳴る男は腰から拳銃を抜き取った。その拳銃の銃口が向く先は当然若者の額だ。

「死ね」

バンッ！

銃声。だが、撃つたのは怒鳴る男ではない。怒鳴る男は静かにテレビの上に倒れた。

「フンッ。馬鹿なオッサンだ。後ろに田が付いていたら、良かつたのにな」

若者は自分の間の前に倒れる、怒鳴っていた男の頭を叩いた。怒

鳴る男が立っていた後ろには、拳銃を構える男が居る。撃つたのはその男だ。

「良くやつた。流石だな」

若者は撃つた男を褒めた。だが、撃つた男は表情変えずに頷くだけ。喜びの欠片も感じられない男に、若者は苛立つていた。

「俺が褒めているんだ！少しでも喜んだりすればよ！」

男は若者をジッと見ていたが、一度目を瞑つた。そして目を開き、頭を下げる。

「すいませんでした・・・」

男が謝った事に満足したのか若者は笑みを浮かべた。

「何だ？アレ・・・。あのガキは何であそこまで偉そうにしてんだ？」

ハグリスは頬杖を突きながら言つた。その質問に興味なさげにツイックが答える。

「偉いんじょ。実際」

ツイックはずつと時計台の方を観てゐる。その視線の先には黒い煙が空に昇つてゐる。

「親の七光りとかか？それともスゲー金持ちとか」

興味があるのか、ハグリスは先程から若者の方を観てゐる。

「さあ」

ツイックは完全に興味無し、と言つた態度をとる。

「おいッ！」

聞こえたか、聞こえてないかは分からぬが、若者はハグリス＆ツイックの方を見ている。そして若い男のこの場には不釣り合いな声が聞こえる。

いつもなら無視するか撃つかのどちらかなのだが、今回はハグリスが興味を示している。異常なまでに。

「俺かい？」

ハグリスが自分の顔を指差しながら尋ねる。

「そうだ。さっきから君らの話声が聞こえてね。俺が七光りだつて？あんまりふざけた事言つと・・・殺すよ？」

凄んで言つたのかもしねないが、完全に不発だ。ハグリスにそんな子供の喧嘩の様な言葉を言つても効果は無い。いや、ハグリスに限らない。島に住む他の人間にも不発に終わるだろう。

今ので、ハグリスは解つた。この若者は最近この島に来たのだと。多分、父親が何かのお偉いさんなのである。若者の周りには少しは出来そうなボディーガードみたいな奴等が居る。まあ、見てくれはそんなお上品な人間ではないが。

「おお～殺しますか？そうですか！面白いジョークですね。流行つているのですか？それ」

ハグリスが似合わない敬語を使い始めた。これは完全に若者を馬鹿にして楽しんでいる。

若者も馬鹿にされている事ぐらいは分かるよつだ。若者顔が怒りの顔に変わる。いや、怒りよりも恥ずかしさからくる顔か？赤面と言

うさぎ。

「黙れ！オイツ！グロウ！こいつを殺せツ！！！！！」

グロウ・・・。それはさつき一人の男を殺した男の名前みたいだ。
男が小さく頷く。

グロウはゆうべつと歩き出し、ハグリスに近づく。

ハグリスは立ち上がり、グロウを見た。

「おい。お前ここの人間か？」

川口川上が尋ね方

「いや、俺も若様と一緒に5日前に来た」

「5田？ おいおい、酒場でピアノは早いな……。家に帰って若

様の宿題ても見てやれよ」

挑発。だが、グロウは眉一つ動かさず、ハグリスを見ている。
成程。ハグリスが一度頭を搔いた。

「スマンな。お前は出来るみたいだよ

ハグリスは格下の相手にしか挑発をしない。それは自分と同じぐらいの力量。もしくは自分以上の人物には敬意を持つてゐるからだ。この島の絶対は力。それは自分の存在理由であり、生きる糧である。その為、ハグリスは喜んでいた。

強い奴が現れ、そして消える事に。

「遺言を聞いてやる。それとも若様に何か言つ事があるなら言へ」
「要らん。お前に何の遺言は無いのか？」

その言葉はハグリスにとって引き金だった。

バンツ！！！

撃つた場所は右足の太股。先程まで拳銃を握っていた筈のハグリスの手には、確りと拳銃が握られている。

貴様！？ 一体何を！？

突然の銃声と痛み。グロウは必死に撃たれた箇所は抑え、止血している。そして優位だと思っていた自分の立場が一転。頭は激痛のせいか、混乱していた。

「何を？不思議な事を聞くな・・・・。ただ、銃を抜いてお前を撃つ
た・・・・それだけだ」

淡々と言つハグリスに、グロウはやつと氣付く。自分は喧嘩を売つてはいけない相手に喧嘩を売つたのだと。そして、今自分は死の淵に立つてゐると。

「遺言はあるか？」

「お、お前は一体・・・?」

た。振り絞つて出した強がりは、自分で死亡「フラグ」を立てる事となつ

「死ぬ奴に言つてどうする？」
バンッ！！

グロウは静かに後ろに倒れる。眉間から血を出しながら。

「なななな、何者だよ、お前……こんな事して俺のオヤジが黙つてないぞ……」

きっと若者にとつてグロウは最強の男だつたのだろう。それが簡単に死んだ。簡単に。まるで子供が虫を殺す様に簡単に。

「オヤジ?」

先程まで黙つて、この場の出来事を傍観していたツイックが尋ねた。

「ああー…そー…俺のオヤジはこの島で金貸しをしているんだ! あの『セブンズ・ツリー』に知り合つても居るんだぞ!」

興奮した口調で若者は喋る。七光りと書つたの合つていたようだ。

「それで? オヤジは誰ですか?」

「モーテン。モーテン=ニクソン」

この名前を聞いた瞬間にツイックの顔に笑顔が現れた。

「成程。そうでしたか。金貸し屋の息子でしたか。これは良かった。仕事が早く終わりそうです」

ツイックの言葉の意味が理解出来ず、若者はキョトンとした顔をしている。

「おい! 仕事つて何だ?」

ハグリストが尋ねる。

「いや、先程ここに来る前に依頼がありましてね。金貸し屋のモー

「デンを殺してくれと」

不気味な笑みを浮かべ、ツイックが笑う。

「ああ～、探す手間が省けるって事か」

「ええ」

一人の会話は異常なかもしれないが、この島では当たり前な会話だ。

「何話してるんだよ！？オヤジを殺す！？そんな事出来る訳・・・
これだから余所者は・・・。と言う様な顔でハグリスは溜息を吐く。

「お前、この島では生きていけないわ」

「生きていけない＝死ね。単純明快な答えだ。
だが、それでも若者は自分の立ち位置が解つてない様だ。

「オイッ！こいつ等を殺せ！！」

若者の周りに居る、ボディーガードもどきの殺し屋がやつと拳銃、
マシンガンと言った武器を手に取り始めた。けれども遅かった。
さつき、グロウが死んだ時に直ぐに武器を取つていれば、もう少し
マシな終わり方だつただろう。ツイックがこの話に興味を持つ前に。
若者の父親がツイックの標的だと知る前に・・・。遅かった。後悔
する暇など無い。

何故なら、ツイックが自分の拳銃を手に握っているからだ・・・。

夢と罪が集つ島で、道化師は舞つ。 中編（後書き）

いやあ～大変だ。予想していたよりも物語りがスローペース。まあ、それは置いといて。今回登場した最悪紳士と殺戮神父。二人ともこの物語りには重要な人物。まあ、道化師が主人公ーなら、こいつら2&3かな・・・。

この話は基本過去なんですよ。はい。しかも順番はこちやです。だから全部読まないと内容解らないみたいな。「あれ？なんでこうなつてるの？」みたいな事になります。つまりは読んでねつて事です。簡単です。

本当は登場人物の事を書きたいんですけど、書いてしまつたら面白くなくなっちゃうので（今でも面白いか解らないが）今は書きません。その人物の話が一段落と言うか、なんとなくその人物が解つてきたなと言うタイミングで補足と言つ形で書いていきたいと思います。

ここまで読んでくれら方、ありがとうございます。
まだ頑張りたいと思うので、応援してください。

夢と罪が集つ島で、道化師は舞つ。

後編（前書き）

善人がこの島に存在しない。
悪と闇が蠢く、醜惡な島。

夢と罪が集つ島で、道化師は舞ひ。 後編

南街 酒場^{バッカス}

「やつぱり道化師に勝てねえーよ
「だがあの賞金は捨てがたぞ？」
「大人數で一気にかかれば良いんじゃないか？」
「お前馬鹿か！？そんな簡単なら、とっくに殺してるぜ？」
「じゃあ一どうすれば・・・」

男達が愚痴つてゐる。正解が無いのに答えを探してゐる。

男達が居る場所は稼ぎ屋達の溜まり場だ。この島はそれ程大きくないが、人口は異常なまでの数だ。その為か、島の様々な所には情報交換する様な場所が設けられている。まあ、設けられていると言つても、島の住人達が勝手に作つてゐるだけだが。

この酒場^{バッカス}は稼ぎ屋の情報交換場だ。多少廃れていが、この島では1、2を争つ程の情報の多さを誇つてゐる。

今、この酒場には異常なまでの稼ぎ屋が居る。理由は当然道化師だ。

「やつぱり止めた方が・・・？」
「馬鹿か！？そんな弱気じや一直ぐ死んじまつぞ！？」
稼ぎ屋達は出口の無い口論をしている。様々な所から罵声などが飛び交い、何が何やら解らない状況だ。

「黙れ、カス共・・・・」

罵声が飛び交う酒場が静まり返る。声を出した主は、決して大きな声で言つた訳ではない。それなのにこの、工事現場異常に五月蠅い酒場は静まつた。理由は、声の主が力を持つていて、女だからだ。

「メ、メデューサ・・・・」

メデューサ。そう呼ばれる少女。外見は其処等に居る様な普通の女の子である。だが、目だけは普通ではない。

メデューサは見る者全てを石にすると言われている。まさに少女の目は、それを可能だと言わんばかりの冷たさである。

「私が行く」

メデューサはその外見からは想像も出来ない冷たい声で言い放つ。

「メ、メデューサが行くなら、お、俺達も・・・・」

大の人が、少女が行くのならと言つてはいる。情けない話だ。

「そうだな！メデューサが居れば大丈夫だろ！？」

一人の男が大声で他の者達に訴える。まるで恐怖を大声で誤魔化し、一人の少女に全てを押しつける様に。

「そ、そうだな！」

「これで、あの道化師を殺せる！」

酒場のボルテージが上がつてくる。だが、そのボルテージは虚しく下がつてくる事になる。

「要らない」

メデューサが言い放つ。その一言でマックスになりかけた酒場が一瞬で醒め上がる。

「えつ？」

メデューサは冷たい眼差しで酒場を見渡し、また冷たい一言を言い放つ。

「カスが幾ら集まつてもカスだ。私の足を引っ張るだけだ」
カス。そう言われてもこの場に居る男達は怒鳴つたりはしない。
何故ならこの場で一番強いのはメデューサだからだ。

「わ、解った・・・」

そう言う意外に正解は無い。逆らつたら一瞬で首が飛ぶ。
メデューサは自分が座っている椅子から腰を上げ、壁に掛けてある黒い布に巻かれている何かを手に持つた。その布に巻かれる何かは、少女が持つには大き過ぎで、少女が持ち上げるには重そうであった。

「行つて来る」

律儀にメデューサはそう言つた。

「お、おうー行つて来いーーー」

「頑張れよーーー」

「お前なら余裕だーーー」

男達が大声でメデューサを送り出す。先程までこの少女に臆していた男達が、「行つて来る」の一言で興奮している。馬鹿で、救いの無い奴等だ。

時計台付近の建物の屋根の上。

片つ端から殺した。久し振りと言うのもあり、道化師は加減しなかつた。華やかに舞い、躊躇無く殺す。だが、道化師は退屈だった。顔見知りの人間が一人くらいは来ると思っていたからだ。けれども来ない。

それだけで道化師は退屈し、少し悲しくなっている。

「何でだろうか・・・？紳士ぐらいは面白がって来ると思ったが・・・何でだろうか・・・？」

道化師は屋根の上から下を見た。明るい・・・。当然だが、明るい。けれども先程まで騒いでいた稼ぎ屋達の姿が見当たらない。

「もう、終わりかな？」
「そうだな・・・終りだ」

背後。振り向く時間は無い。

道化師は真上に跳んだ。

ブウンッ！長い刃物が空を斬る。

「おつと・・・」

道化師は自分に斬りかかった者の後ろに着地。

「ん？これは、これは。久し振りですね？メデューサ」

斬りかかった主はか弱く見える少女。だが、その少女は不似合いな刃物を握っている。

どれ位の長さか？2メートルは無いが、それ位の長さだ。しかもかなり重そうである。

「いきなりの挨拶、かなり物騒だね」
道化師がネクタイを正しながら言う。

「別れの挨拶だったのに、まだ生きているのか」
左手に持っていた刃物を、右手に持ち替える。

「まさか君が来るとは・・・。少しどさكري」
微笑みながら囁つ。

「吃驚？面白いジョークだ」

メテユーサはそう言い、鼻で笑つた。

「ジョークではないよ。本音だよ、本音」
道化師は平然と嘘を吐く。

「さて、無駄話は嫌いなんだ。さつさと・・・死ね」
メテユーサがそう言うと道化師の視界から消える。

「早いね・・・」

そう言い、道化師は後ろを向いた。

メテユーサが突っ込んで来る。普通ならこれで殺せるが、何故かメテユーサの眉間に皺がよっている。
グサッ！刃物が道化師を貫く。だが、血が出ない。

「残念」

道化師が「コソ、と笑う。

「クソツー！」

メデューサは、道化師の体から刃物を抜き、一度後ろに下がる。

「もつと早ければ良かつたのに・・・」

道化師は微笑みながら言ひ。

何故道化師を殺せなかつたのか？簡単。道化師が気付いたからだ。メデューサが背後から来ると。そして道化師は後ろを見て、わざと刺された。そうするのが確実な回避方法だからだ。

攻撃法とタイミングさえ分かれば、道化師はその攻撃を無効に出来る。だが、逆に気付かぬうちに、つまりは不意打ち。そうすると普通にダメージを受ける。だが、一瞬でも攻撃に気付けば死なない。

メデューサの攻撃に、道化師は一瞬で気付いた。どこから来るか、どう来るか。だから死ななかつた。

「化け物・・・」

メデューサが悔しそうにそつ、言ひ。

「酷いな・・・」

メデューサは目を瞑つた。

「！？本気になつた・・・」

道化師の表情が変わる。先程までの雑魚を相手していた顔ではない。こちらも本気の表情だ。

「これで・・・終りだ」

メデューサが目を開いた。目の色が変わつてゐる。先程までは綺

麗なライトブルーだつたが、何故か黒くなつてゐる。

メデューサは目線を道化師に合わせた。

「！？」

動かない！？道化師の体が一瞬で固まつた。
これがメデューサの力。ギリシャ神話に出てくるメデューサ同様。
見た者を石にする力。

またメデューサが道化師の視界から消える。

「貴様は見てないとその力は使えない・・・。だから貴様は先程私
を視た」

どこからかメデューサの声が聞こえる。

それと、今メデューサが言つた事は事実。例え道化師が気付いた
からと言つて、それを完璧に無効は出来ない。まあ、視なくとも多少は無効出来るが、完璧ではない。その不足を補う為に、道化師は
見ているのだ。

「（）名答・・・。でも、少し遅いな」

「！？」

そう道化師が言つと、メデューサの視界から消えた。石の様にし
たのに消えた。

「クソツ！何所だ！？」

メデューサが辺りを見渡すが人影は無い。

「「」」ちだよ

遠くの方で声が聞こえる。その声の方向を見たら道化師が立っている。だが、道化師が立っている場所は、ここから10メートルも離れた向いの建物の屋根の上だ。一瞬で移動した・・・人間の業では無い。

「君の力は不完全だね」

侮辱。メデューサが怒鳴つた。

「何だと！？」

すると、怒鳴つたのが面白かったのか、道化師が笑いながら言つ。

「だつて、私の事を完全な石に出来なかつただろ？だから今、私はここに居る」

そう言つて道化師は下を指した。

「「」」ちへ来い！道化師！――！」

メデューサが更に声を張り上げ怒鳴る。

「いや、今回はこれで私は帰るよ」

怒りのボルテージが上がる。

「ふざけるな！逃げるのか！？」

怒り。怒り。怒り。今それ以外の感情は無い。

「逃げるつて・・・。今の君じゃ無理だよ。私を殺す事は

「やつてみないと分からぬだろ！？」

「簡単に死ぬのか？」

先程まで笑っていた人間とは思えない冷たい声。その冷たさでメデューサは冷静になつた。

「クソッ！！」

すると道化師は微笑みながら闇に消えた。

金貸し屋 ニクソン家屋敷。

広い屋敷。だが、少しこの街と合つていない。

「おい！コーチェンはまだ帰らないのか！？」
豚の様な男が吠えている。

「は、はい！申し訳ありません。ガードの者達と連絡が着かなくて···」

「言い訳は聞かん！···さつさと探して来い···」

そう言い豚の様な男は机を叩いた。

バンッ！バンッ！バンッ！···銃声が鳴り響く。

「な、何だ！？」

「じゅ、銃声！？」

豚の様な男は慌てた。

「早く見て来い！！」

そう言いまた、机を叩いた。

「は、はい！」

「その必要はねえーよ

男の声が部屋に響く。

「だ、誰だ！？」

豚の様な男が慌てる。

パリンッ！部屋の電気が消された。それと同時に銃声が一つ。

パンッ！そして何かが倒れる音が聞こえた。

「な、何だ一体！？」

動搖し、パニックになつていてる。

カチンッ、ジュボ。火が灯る。そして煙が部屋を動く。誰かが煙草に火を点けたのだ。

「だ、誰だ！？」

「そう慌てるなよ」

静かな声。だが、豚の様な男は一瞬で分かつた。この声の主は完全な人殺しだと。

「似てねえーな。全然」

何を言つてているのか解らなかつた。

「そうですね」

自分の真横から声が聞こえる。豚の様な男は固まつた。

「動くな。そして喋るな」

真横から聞こえる声には殺意しか感じられなかつた。

「お前はモーテン＝ニクソンだな。残念ながらお前は、この島には不要な人間と判断された。よつて、この私がお前を殺す。拒否は出来ない。死ぬ意外に道は無い」

冷酷な死刑宣告。この島に来てまだ5日。早過ぎる。

「最後に、聞いても良いか？」

振り絞つて出した声。

「喋るなと言つたが、まあ、良いだら。何だ？」

「息子だけは！…私の息子だけは助けてください…」
泣きながら哀願する。

「親馬鹿か…」

煙草の煙を吐きながら言つ。

「息子…。ああ、ならお前の直ぐ近くに居るよ」
「えつー…どうですー？」

「いいだよ…」

そう言つと、机の上に何か投げられた。暗くて良く見えない…。
。これは…。指？指輪が付いている指…。その指輪を見て気が付いた。そして理解した。

息子は…。殺されたのだと。すると、何かのカタが外れたのか、モーテンは叫び出した。

こめかみに銃口が当たる。

- ၁၅၁၁-

バンツ
！
！

「はあ～。指の件は少しやり過ぎたか・・・」

ハグリスは酒を飲みながら呟いた。

「やり過ぎ？良くならないですね・・・最後に息子の一部と対面できたんですよ？お礼を言われても可笑しくないですよ」

「冗談は言つて無い。これが本音だ。」

ツイックは完全な殺人中毒者。それを普段は十字架。つまりは誓いにより抑えている。だが、それは暗示みたいなものだ。本性は人を殺したくてしかたがないのだ。

その暗示は拳銃を握る事で消え失せる そして死るのに殺人重罪だけだ。

「こつちが悪人みたいだ・・・」

ハグリスは酒に酔つたら、ネガティブになる。こつちも二重人格

みたいなものだ。

「悪人？ それは間違っていますよ、最悪紳士。この島に善人何て存在しませんよ。存在したとしても、それは善人では無く、偽善者です。それに、もし善人がどんな悪人でも人を殺せば、その善人も悪人です。この世界は悪人で成り立っているんです。90%の悪人と、10%の善人でこの世界は出来ているんです。だから我々は善人では無く、悪人ですよ」

悪人。この島は悪でしかない。少しの希望すら、闇が包む。虚しく、醜悪で、儚い。

「そんなもんか？」
「そんなもんです」

空は少し明るくなつてきた。

2000年 1月1日

『夢と罪が集う島で、道化師は舞う』

夢と罪が集つ島で、道化師は舞つ。 後編（後書き）

いや～何か、本当後味悪い（笑）
でも、これこそですよ。今自分自身のボルテージ上がつてます（笑）
ええー今回登場した、メテューサ。この子は主役程ではないですが、
準主役です。
まあ～でもこの子は凄く今後活躍できる日が来ますよ。ええー本当
です。

今回の話は主役のくせに、道化師あまり活躍せず（笑）ハグリス&
ツイックが表にガンガン出てましたね。この一人の方が動かしやす
いんですよ。道化師が動いたら簡単に話終わっちゃうんですよ。
次回の話は少し過去に戻ります。はい。何故戻る！？いやいや、な
んとなくですよ。なんとなくでもちゃんと理由？がある！・・・と
思う。

次回も後味悪くなるかもしだせませんが、悪人は悪人でも善人より良
い悪人？を目指します。

ええーここまで読んでくれた方。次も読んでください。
ありがとうございました。

女は永遠を望み、道化師と永遠を行へ。

前編（前書き）

初めて道化師に枷を付けた女。
心は鈍く、全てが変わる。

女は永遠を望み、道化師と永遠を行く。前編

1994年 11月23日

陽は落ち、代わりに街灯が島を照らす。少しづつ陽が落ちるのが早くなっている。

良く、夜が怖いなど言つ者が居るが、この島にはそんな奴は殆ど居ないだろう。

夜になれば様々な店が活気づく。店が活気づくのと同時に人間も活発になり、様々な問題を起こす。その為、陽が落ちるのが早いと、この島の住人達の活動時間も増える。そう、あの男も例外ではない。

道化師。その男に名は無く、道化師と言つ記号が名となっている。

ゴオーン・ゴオーン・ゴオーン。

時計台が6時を指す。この時計台は夕方6時、深夜12時、朝方6時にしか鳴らない。

夕方6時は始まり。深夜12時は中盤。朝方6時は終わり、とまあ、ふざけ過ぎの遊び心だ。

今は夕方6時。つまり始まり。醜悪で最低な島の賑わいが・・・。

ここはホテルと名が付いているが、貸し部屋みたいなものだ、定期的に金を入れれば半永久的に住める。

この島には家も無い浮浪者がウロウロしている。そんな奴等は他人の家に勝手に侵入し、そこに住み始める。ふざけるなと言いたいが、そんな崖つぶちな奴等は何をしでかすか分からぬ。その為仕方なく家を出て、このホテルの様な貸し部屋に住むのだ。だからこの貸しホテルは浮浪者のお陰で、生計が立てられるのだ。

だが、こんな貸しホテルに住むのは家を取られた者だけじゃない。こんな男も住んで居る。道化師だ。

「あれ？ いつの間にか食料が・・・」

冷蔵庫を開け、食事を作るうとしたが材料が無い。

「買わないと・・・」

そう言つて道化師は部屋を出た。2LDK。内装はかなりオシャレな作り。だが、隣の部屋から毎日の様に笑い声が聞こえるのが難点。

道化師がホテルから出た時は、もう街はかなりの賑わいだった。

「卵・・・野菜類・・・鶏肉・・・後何だつたか？」

普通に買い物。道化師は基本、顔は隠さない。いや、隠さないが覆う。違う人間の顔し、外に出ている。戦う時や、部屋に居る時は素顔だ。だが、流石に人前に出る時は変装しないと直ぐにバレる。

まあ、道化師の変装は変装の域を超えて、もう完全にその人になる。背・声・癖・体臭・肌質から趣味まで、完全にその人になる。もうこうなると、道化師よりもマジシャンだ。

「よし。これで何とかなるだろ・・・」

必要な材料と、暫くの食料を買った。道化師も人間だ。食べるし、寝る。

「オイツ！ガキイーテメエーふざけるなよ！..」

汚らしい男の怒鳴る声。ふと、その声の方に目線を向ける。

「オイツ！何か言えや！..ブツ殺スぞ！..」

怒鳴る男の怒鳴っている相手は・・・女の子？歳は10歳も無いだろう。あだけなさ全開の女の子は、汚らしい布を体に巻いているだけだった。

「テメエー・・・ヘンツ。どつかの奴隸屋に売り飛ばしてやるゼー..」
野蛮な事を言い出した。10歳位の女の子相手に怒鳴り散らす男。力ス意外の何だと言うのだ・・・だが、幾ら男が怒鳴り散らしても女の子は動じない。いや、動じないと言うよりも気付いてない？そんな訳無いが、女の子は先程から下を向いて動かない。

「やつぱり、ブツ、ブヘエ！？」

横つ腹を一突き。男は息苦しそうに崩れ落ちる。

「大丈夫かい？お譲ちゃん」

道化師が手を差し伸べる。それを感じたのか、女の子はゆっくりと顔をあげた。

赤い髪、赤い目と白い目のおッドアイ。特徴が盛り沢山だ。

「お兄さん・・・だれ？」

消えそうな声。けれどもその声には悲しみは無い。

「普通のお兄さんだよ」

道化師はいつもなら絶対出さない声を出した。
グゥ～。女の子のお腹が鳴る。

「おなかすいた・・・」

女の子はお腹を両手で押さえながら言った。こんなゼスチャーを
され、そのままバイバイは出来ないだろう。

「じゃ、お兄さんのお家で」飯食べるかい？」

やつぱり、待っていましたと言わんばかりの笑顔で頷いた。

「ヨシシシ・じゃ、行」つか？」

道化師は女の子の手を握り、貸しホテルに帰らうとした。

「お・・・い、ま、待てや・・・」

先程、横つ腹を一突きされた男が苦しそうに起き上がり、道化師
を引きとめる。

「何ですか？」

「ぶつ殺してやる・・・」

そう言い、ナイフを取り出した。

「あっ、やつ」

そう言い道化師は一度指を鳴らした。
パチンッ！そして何事も無かつた様に歩き出す。

「お、おいーまつ・・・グウヘン！オエンー」

いきなり男は苦しみながら崩れ落ちた。口から泡を吹きながら悶える。そして、体をバタつかせながら死んだ。

その死体を女の子は見つめていた。不思議そうに見つめていた。

「どうしたんだい？」

道化師が少し離れた所から聞く。女の子は直ぐに走り出し、道化師の横に付いて歩いた。

「名前は？」

貸しホテルに着き、女の子に食事を作つた。女の子は凄まじい勢いで食べた。この女の子の胃袋に、こんなに食べ物が入るのかと言ひぐらい食べた。

そして、一段落した処で女の子に名を聞いた。呼ぶのに不便だからだ。

「なまえ？」

「そう、名前」

女の子は一度首を傾げ、そして何か思い出した様に答えた。

「レーーーー！」

満面の笑顔で言った。この島には似合わない、曇りが無い笑顔。

「・・・そうか。レーーか」

レーレ・・・。

「レーレは何であるそこに居たんだい？」
素性を知る。これは重要だ。

「あるいて！-！」

噛み合わない・・・。

「家どこへ？」

「このまえ、おつきこおうちにていた！」

噛み合っている様で、噛み合って無い。レーレで道化師は氣付いた。
私は・・・子供が苦手だ・・・。

「家族は居るか？」

その問いにレーレは不思議そつな顔をした。

「かぞく？」

「何だ・・・何かおかしい・・・。

「レーレの事大切にしてくれる人の事だ」

自分に経験が無いくせに、スラスラと言えたモノだ。

「ん～・・・あつーーるよー！」
やつと前に進む。

「誰だい？」

「しそーー！」

シソーラ・・・・。

「お姉ちやんかい？」

また、レー・レは不思議そうな顔をした。

「？ちがう。なにそれ？ しそらは、しそらだよ！ ふたりはひとりで、ひとりはふたりなの！」

「二人は一人で……一人は一人……」

どこかで……何だこの違和感……。

ふと、レー・レの腕に目が行つた。

「！？」

レー・レの左手には鳥籠の烙印が押されていた。

「レー・レ……それどうした？」

道化師が烙印を指差し聞いた。

「これ？ これね……なんかきづいたらついてた！ でもね、でもね、しそらはだいじょうぶだつて、いつてた！ だからだいじょうぶ」

「大丈夫？ ……何だコレ……。

「ふあ～。眠い……」

レー・レが目を擦りながら、首をカクカクしていた。

「向こうの部屋のベッド使って良いぞ」

道化師が隣の部屋を指差した。するとレー・レが隣の部屋に歩いて行つた。道化師もその後を追い、レー・レが寝るまで傍に居よつと窓つたが、レー・レはベッドに入つた瞬間に眠つた。

「早い……」

これで良いだろう・・・。

鳥籠の烙印。これは奴隸につけられる烙印。

「確かに・・・この烙印の模様は・・・スタイン＝バーデンか・・・」

道化師はゆっくりと戸を開め、今まで被っていた顔を剥がした。

「ふうー。これで少し楽になった・・・だが、多分これから面倒な事になりそうだ」

道化師はゆっくりと貸しホテルを後にした。

女は永遠を望み、道化師と永遠を行く。 前編（後書き）

いや～結構投稿ペース早いですね？普通かな・・・。頑張ってるんですけどね。前編だけで一時間近く使ってますからね（笑）今回登場したレーーー！この子の事はまだ何も言えません。言つたらネタバレです。書いてる張本人がネタバレはマズイでしょー？だから言えません。

今回の話も結構後味悪いですよ・・・。でもかつこいい感じです。誰がとはまだ言えませんが、かつこいいです。

でもやっぱり道化師動かしづらい（笑）。

全然動かない。まったく。微動だにしない！かなり苛々ストレス溜まる。

まあ、そんな中でも頑張りたいです（なんだそれ・・・）

ええ、ここまで読んでくれた方、ありがとうございます。
まだ続きますので、読んでくれれば嬉しいです。
それでは・・・。

女は永遠を望み、道化師と永遠を行へ。

中編（前書き）

瓜二つの女。その女がもたらすのは、
生か・死か・・・。

女は永遠を望み、道化師と永遠を行く。 中編

此処か・・・。西街　スタイン＝バデンが経営する、人身売買を元にする店・・・。別にこう言つ店を否定するつもりは全くない。ただ、嫌いなだけ。簡単な理由だ。

道化師はスタイン＝バデンの店が100メートル程の所から、店の中の状況を把握していた。把握と言つても、そんな完璧なモノではない。精々解るのは、店の間取り図どどこに誰が居るかぐらいだ。

まあ、これだけ分かれば侵入するのも造作も無い。

道化師は一度目を瞑り、呼吸を止めた。一瞬、道化師が目を開けた瞬間にはもう、店の中に居た。何をしたかと聞かれれば、口では全く説明は出来ない。

ただ、凄いスピードで屋根の上を走り、店の窓を突き破り、侵入。言えば簡単かもしれないが、人の枠を超えてしまっている。

ジリリリリリリリイ！！！！！店の警報が鳴り響く。

窓を破つただけで鳴ったのか？随分警備に金を懸けている。何か見られたくないモノがあるのか？増え面倒になつてきた。

「こっちの方だ！！」

「侵入者かもしけん！急げ！」

銃器のガチャガチャと言う音と、カツカツと言ひ足音が聞こえる。

「さて、目的を果たしますか・・・」

また、道化師は目を瞑つた。そしてまた一瞬。道化師が一瞬で消えた。これは流石に説明できない。消えただけで理解して欲しい。

外が騒がしい。何かあつたのか？警報が先程からずっと鳴り響いている。侵入者か？

ガチャガチャ。鎖で繋がられた足枷。重く、冷たく・・・。

「何だ！？貴様！？グワアッ・・・」

！？監守の声。誰かにやられたのか？

カツ、カツ、カツ。・・・響く足音が近づく。体が強張る。そして小さく振るえる。

「いじでしたか？」

男の声。そして鉄格子の向こうに居たのは、見た目は二十歳前後の男。

「あ、貴方は？」

私は、今にも消えそうな声で聞いた。すると、私の声を聞いた男の顔に、笑みが零れる。この笑みの意味は私には解らなかつた。

「貴女そつくりな女の子が私の家に居ます」

！？

「・・・レーレですか？」

「はい。今は眠っていますよ。お腹がいっぱいになつたのでしじう
ね、気持ち良さそうに寝ています」

男はゆっくりと喋りながら、監守から奪つたのであらう牢の鍵を使
い、鉄格子の扉を開けてくれた。

「足枷ですか？」

鉄格子を開け、私の足首を見て言つた。

「はい。だから・・・」

私が言いきる前に、男は牢の中に入つて来て、足枷に触れた。す
ると一瞬足枷が光つたと思えば、足枷が真つ二つになつた。

「！？」

私は男の顔を見た。笑み意外の感情は無い。その笑みすらも、偽
物の様な気がしてしまつ程、この男が不気味に思えた。

「さあ、どうぞ・・・」

そう言い、男は私の前に、手を差し出した。私は少し戸惑つた。
この手を取つてしまつたら、何処か知らない場所に連れて行かれる
のではないかと・・・。

「大丈夫ですよ」

男が言つ。まるで私の心を読んだ様に。

多少の戸惑いはあつたが、私は男の手を取つた。

私は男に手を引かれ、牢を出た。すると、男はいきなり止まり、此方に振り向いた。

「すいません。貴女のお名前、聞いて良いですか？」

そう恐る恐る言つ男が、どうしても演技に見えてしまう。私は多少警戒しながらも、自分の名前を言つた。

「シソラ……です」

そう私が自分の名前を言つと、男はまた笑つた。だが、今回の笑みは完全に偽物と解つた。

「そうですか……シソラですか。良い名前です。あつ、失礼ながら、ここで待つていて貰つて良いですか？ちょっと野暮用で……」

「はあ……」

「警備の者達はこちからで片付けますので……睡眠でも取つて待つていてください」

男はそう言つながら、重い扉を軽々と開け、闇に消えた。

「一体何が起きているんだつ……？」

周りを高級で固めた様な男。服・靴・指輪・ネックレス・家具・その他諸々、全て高級なブランド物や、プラチナ品である。見た目からして、金に五月蠅そうな、亡者だ。

「クソッ！ 一体何が・・・まさかバレたのか！？ いやそんな筈はない！ 何せ、あの方がバツクに居るのだから・・・」

震える手を抑えながら、葉巻に火を付け様とした。

「バツクに居るのは誰だい？」

声が聞こえた。幻聴？ いや、違う本物の声。背筋が凍つた様に冷たい。

「だ、誰だ？」

当たりを見るが、人は居ない・・・。

「ここだ」

目の前を見た。先程まで、誰も居なつた筈なのに、そこには若い男が立つている。

「貴様は・・・！」

震える声で聞いた。

「お前には私の聞く事に答へれば良い・・・。嘘偽りなく、眞実だけを」

殺意。それ以外の何と言えばこの空氣を説明できる？ 何をしても殺される。答へても、答へなくても。道は分かれている様で、最後は同じだ。それならば・・・。

「わ、分かつた。答へる・・・」

素直になつた方が幾らかマシな死に方だろつ。

「貴様・・・いや、貴様等がこの島に連れ込んだのはアレか？」
この問い合わせで、この男が何者かも、目的も理解した。

「そうだ・・・。本人が望んだ・・・」

声の震えは止まらない。この男は、こんなにも人に恐怖を与える事が出来るのか？この男を・・・人間と言つていいのか？

「成程・・・これで全て合致した・・・さて、貴様の処分だが？この計画を立てたのはどっちだ？」

凍える様な声、瞳。全て見透かされ、嘘など付ける余裕など無い・・・。

「あの方が・・・アレを利用しようと・・・」

「俺の首か？」

自分の事だと言つのに、冷静・・・。

「はい・・・貴方の・・・道化師の命が目的です」

こんな男・・・殺せる筈がない。逆だ。この男は狩られる側の人間ではない。この男はいつも、どんな時も狩る側の人間なのだ・・・。私は・・・私達は逆らつてはダメなのだ・・・この男には。

私は目を瞑り、死を覚悟した。

「殺しはしない・・・その代わり、お前から光を奪う。大好きな金も宝石も一生見れない様に・・・」

その言葉は残酷なのだろうけれども、今の状況の私には、救いの言葉だった。視界を失うよりも、命があれば・・・。

道化師はそつと、男の顔の前に手を突き出し、その手が一瞬光、

<div[](https://i.imgur.com/3H7zJLW.png)

あまりの激痛に、男は椅子から崩れ落ち、目を抑え、叫ぶ。

「もう少ししたら痛みも引くだろ？・・・それまで、その激痛に喰われ続けれろ・・・」

そういう残し、道化師はまた姿を消した。

いやあ～何が大変だ・・・。色々とこの物語り全然進まない・・・。殺してばっかりです・・・。スマセン

でもこの話から少しずつ物語は前進したり、後退したり・・・。やつぱり最後のフィナーレになつてみないと解らないですよ。

書いてる本人が出口見えない状態ですけど・・・。でも探してるんです。ライトで照らしながら、行つたり来たり、迷つたり・・・。

もともと作者本人物事が長く続いたことがありません。

そんな中でこのような小説に挑戦と言つのが無謀で、そんな無謀の中からでも、少しずつ物語りが生まれるのは、気持ちが良いものです。

次は後編。少し悲しみと、謎を残して終わります。

またこんな伏線残して、途中で終つたらどうするのかと・・・。ホンと無計画だ・・・。

無ばつかりですよ・・・。悲しい・・・。

ええ、ここまでこの馬鹿に付き合つてもいい、ありがとひげーこま
す。

話はこれからも続きますのでよろしくお願ひします。

よろしければ『成功率』の方も読んでください。そして何でも言つ
てください

それでは、また・・・。

女は永遠を望み、道化師と永遠を行く。後編（前書き）

戦いは一瞬。だが、その後に傷を残す。

女は永遠を望み、道化師と永遠を行く。 後編

西街・地下

地下空間。けれども暗さや閉鎖感は無く、ちゃんと天井には明かりがあり、何百人でもはいりそうな広さがある。

そのだだつ広い空間の真ん中には、丸いテーブルと言うには大き過ぎ、ディスクと言うには不釣り合いな物がある。まあ、丸いテーブルで良いだろう。

そのテーブルには、六人の人間が椅子に座り、各自好きなように時間を消費していた。

だが、その中の一人が、痺れを切らした様に、テーブルを叩き、立ちあがつた。

「何なんだよ！ 一体！ 呼ばれて来てみらあー呼んだ奴が来やしねえー！ どうなつてんだ一体！」

怒鳴り散らす男。

「黙りな。金円・・・」

金円と呼ばれる男の前に座る、長い髪の女が言つ。

言われた事に腹を立て、先程以上に、金円は怒鳴った。

「つむせーぞ！情炎風情が！」

「風情？ナメるなよ！金を数える事しか出来ない能無し……」

言い争いになる。

情炎の隣に座る男が、この言い争いを止める。

「少し落ち着け……金円・情炎……」

罰則の一言で、一人の罵声は止んだ。

「おい！俺達を呼んだのは一体誰だよ！俺は忙しいんだ！仕事を残したままなんだよ！」

金円が言つ。

「我々に召集をかけたのは……道化師だ……」

罰則がそう言つ。『道化師』の一言だけで、この場が冷たくなる。

「おいおい……道化師は俺ら『セブンズ・ツリー』には関係しないんじゃないのか？」

金円が異常な汗をかきはじめる。

「誰かが……道化の機嫌を損ねたのでは？」

本を読みながら、虚言が言つ。

「この中にですか……」

首を回しながら忘却が言つ。

「もしそうなら残念だな」
棒読みで、生殖が言つ。

「おいおいーあり得ないだろー？俺等がそんな事するわ・・・」

「前例が無い訳では無い・・・」

罰則が金円の言葉を遮りながら言つ。

その言葉に金円の言葉詰まる。

「それでも・・・」

「何をそんなに慌てている？」

皆の口つきが変わる。

「金円・・・何故慌てる？」

金円の背筋が凍る。後ろから声が聞こえる・・・冷たい殺意が籠つた言葉が。

「い・・・や・・・」

ふつと道化師が笑う。

「スタン＝バデン・・・知ってるか？」

不意な問いに戸惑つ。

「いや、し、知らない・・・」

金円は首を横に振る。

「そつか・・・いや、先程そいつの所に行き、視力を奪つてきた。
眞実を言つたからな。それに、そこで一人の少女を見つけた・・・」

全て・・・知られている。

「い、いや・・・俺は・・・」

もう遅かった。いや、弁解や命乞いは無駄だつただらう。道化師は完全に殺すつもりだつただらう。

「御苦労だつた・・・ウォール＝スルベロア・・・」
グザツ！喉を、剣が付き抜ける。剣先からは、ポタポタと血が落ちる。金円は何も言えずに死んだ。

道化師は剣を抜き、その場に捨てた。抜くのと同時に、金円はテーブルの上に倒れこむ。

「始末を任せる・・・」

道化師は言つ。

「この事の為だけに？」

忘却が尋ねる。

「いや、コイツは然程どうでも良いんだ・・・問題はコイツ等が運び込んだモノだよ」

道化師がそう言つ。

「運び込んだモノ？何だいそれは？」

情炎が尋ねる。

「島の外の・・・殺人鬼さ・・・」

そう言つと、道化師は消えた。

南街 『キャッスル』

部屋の一室・・・。私は部屋のベッドに腰を下ろしていた。そのベッドには、髪が赤い女の子が寝ている。

「・・・レー・レ」

私はそつと頭を撫でる。

スタンの所から助けてくれたあの人は、私をここに運んでくれて、直ぐに消えた。消える前に、直ぐに戻るとは言つっていたが・・・もしかしたら、あの人が・・・。

「寝てないのかい？」

横から声がし、驚きその方を向いた。

「驚かしたかい？」

「あ・・・すいません」

私を助けてくれた人。私は頭を下げながら言つた。

「レーちゃん・・・隨分寝てますね」
その人はレーを見ながら言つた。

「それに異常なまでに食べていた」
今度は私を見ながら。

「そうですか・・・育ち盛りだからでしようか?」
私がそう言つと、その人は呟いた。

「二人は一人で、一人は二人・・・」
私の身体は一瞬びくつとなつた。

「どこで・・・」

恐る恐る。

「レーレちゃんが言つていました。駄目ですね・・・ちゃんと言わ
ないと」

完全にバレている・・・私はゆっくり立ち上がり、レーレの頭に
手を乗せ、立ちあがつた。

バリーン!!!! 部屋の窓を破り、屋上に逃げる。

「流石・・・《トゥー・リップ》・・・」

道化師は後を追いかけ、部屋を出た。

屋上。冷たい風が吹き、髪が舞う。

「こつから解つていたの？」

屋上に立つ女は、先程までの『レーレ』でもなければ『シンラ』でもない。

髪は赤。両目も赤。年齢は二十代後半ぐらいか、長い髪は美しく、美女と言つ言葉が相応しい。

「いつから・・・いつからだらうな・・・確信は貴女を見た時です
よ」

女が笑う。

「そう・・・では、貴方が道化師？」
まるで待つっていたかの様な口ぶり。

「ええ、そうですよ。レーレ＝シンラ・・いや、《トゥー・リップ
『

「そんな事まで・・・」

驚いた様に見せたが、表情は笑つていた。

「でも、まさか身体2つに出来るとは・・・」

「身体を2つにしないと、理性が保てないのよ。この姿だと、欲しき
てしまうの・・・永遠を。だから2つに分けた。『レーレ』の役割
は食事と睡眠。『私』は理解と戦闘。だから『レーレ』は異常なま
でに食べ、異常なまでに寝ていた」

「永遠とは？」

道化師が尋ねる。

「命よ・・・永遠の命・・・それが欲しいのよー」

そう言い、《トゥー・リップ》道化師に突っ込んだ。

「貴方は永遠なんでしょう！だから欲しい！！」

そう言い、腰から短剣を取り出し、道化師を刺そうとした。

「残念。それで殺せない・・・」

そう言い、道化師は真上に跳んだ。

「私は永遠ですよ？そんな鉄の塊で殺せるものか」

そう言い、道化師は《トゥー・リップ》の後ろに着地した。

「せっかく、《一線越えた》のに・・・何で私は永遠では無いの？..」震えながら言つ。

「だから・・・貴方が欲しいのよ」

そう言い、道化師を見た・・・が、そこには道化師は居ない。

「！？」

「ひひひですよ？」

後ろから声がする。

グザツ！胸に鈍い痛みがはしる。

「わ、私の短剣・・・いつの間に・・・」

途切れそうに言つ。

「・・・何で・・・ここに来た？何故？」

先程までの口調とは一変し、年齢相応な口調になつてゐる。

「あ、貴方も……人間……ら、らしい所があるのね……」

『トゥー・リップ』はその場に倒れかけた。道化師がとっさに支える。そしてゆっくりと、寝かせる。

「何故だ？」

道化師が尋ねる。

「お、おし……教えて……もらつたの……」

「誰に？」

『トゥー・リップ』は少し目を瞑り、口を開く。

「
微かな声で言つ。

だが、その言葉は道化師には意外過ぎた。

「本当か！？本当に？」

「取り乱してゐ……ほ、本当に……貴方の知り合いなのね……でも、私は……な、名前以外何も知ら……ない……のよ」

少し落ち着きを取り戻し、道化師は『トゥー・リップ』の頭を撫でる。

「フフ……刺した張本人とは……お、思えないわね……」

笑つてはいるが、表情に笑顔は無い。

「これが……俺の役目だ。お前をこのまま野放しすると、結局は

俺が殺さないといけない。だから、今殺す事にした

「口調・・・変わっているわよ・・・それとも・・それが本当の・・貴方?」

そう言われ、自分が変わっている事に気づく。

「これは、これは・・・失礼」

口調を戻す。

「わ、私・・・さつきの・・方が良いわ・・・
そう言われ、口調を戻す。

「辛いか?」

「優しい・・・のね・・・」、いつ・・・みていたら・・貴方が・・
ひ、人殺しには見えないわ」

そう言い、手を伸ばし道化師の頬に手を添えた。
『一線を越えて』いる。だから普通なら死んでいる筈の傷でも、
簡単に死ねない。

「最後に・・・お願ひ・・・き、聞いて・・・」

消えそうな声で言つ。

「何だ?」

手を握りながら聞く。

「貴方と・・・永遠でありたい・・・ず、ずっと・・・い・・・一緒・

・・」

『トゥー・リップ』の目から涙が流れる。

「分かつた・・・一緒に居よう」
道化師がそう言つと、《トゥー・リップ》は微かに微笑んだ。

「そ・・それ・・・だ・・・けで・・・」「・・に・・来て・・・よ・
・よか・・・た」

静かに瞼を閉じる・・・。眠るよ。静かに。

「おやすみ・・・」

「ゴオーン・ゴオーン・ゴオーン。

朝方の6時。時計台が、終りの時刻を知らせる。

1994年 11月24日

なんか、少し物足りない気が・・・。

ほんとはもつと戦う筈だったのけれど、トゥー・リップにはそんな戦闘能力は無いので、それにまだ、道化師の最強は打ち破られてはいけないのでね。

それにしも、ほんとすつきりしない終わり方ですわ。
胸刺しとして優しいですから・・・。

この優しさの事も色々事情があるのでですが、言えません。

まだまだ、色々伏線やらがやっと出てきて、少しずつ物語りはじくなつたのでは？

ええーここまで読んでくれてありがとうござります。

真っ赤なサンタは、道化師を漬す。

前編（前書き）

動く。蠢く。越える。

復讐鬼が、道化師に近づく……。

1996年 11月7日

東街 別名・墓場

男が一人、墓の前で佇む。

「何故・・・お前が死ななきや・・・」

呟く男は悲しげに、墓に花を添える。

死んだ者は生き返らない。これは常識であり、この事はありとあらゆる万物共通の運命。

だが、死んだ者は物と捉えてしまつたら、人間は化け物になる。リアルすらが、非である様に感じたら、人間はこの世界で生きて行く事ができなくなる。

「誰の墓だい？」

不意に後ろから声をかけられる。

驚き、佇む男は振り返る。そこには、ロングコートを着た、無精髭を生やす男が立っていた。

「何の用だ？」

そつけなく言い返す。

だが、無精髭の男は続ける。

「大事な人の墓なのかい？もしそうだつたら、『ご愁傷様』……」

これは気遣いの言葉なのか？それともただ佇む男をからかうだけの言葉なのか？

本心は、分かる事は無い。

佇む男は、独り言のよつに話し始めた。

「俺の……娘みたいな存在だつたんだ。俺は結婚してなくて、でも子供は好きだつた。その子供が欲しい衝動は、次第に大きくなつていつた。その時は、まるで化け物になつていく様で、恐怖した。そんな恐怖がピークに達しようとした時、俺の目の前にある少女が倒れていた。可愛らしくて、とても……可愛らしい少女を……俺はこの子を育てる事にした。この島じや、子供だろうが容赦無く殺す輩が、沢山居る。俺はこの子を守りたい半面、この子を手放しあく無かつたのだろうな……。この子との生活は、天国の様に安らかだつた。今自分が居る所が島ではないような気がした。けれども……」

男は、俯いた。そして、自分の唇を噛み、まるで自分を呪う様な目をした。

「けれども？」

無精髭の男は尋ねた。この問いは、話の次が気になるのか。それとも早く終わつて欲しいのかは分からない。

「突然消えたんだよ。俺の前から……。テーブルに書置きが一枚

だけ。しかも、その内容はさよならのたつた4文字。俺は絶句したよ。そして、悲しんだ。死のうともした。だが、その子が消え暫くし、その子の死体が発見された・・・。誰かに殺されたんだ。俺は死のうとした。だが、今回は悲しみよりも怒りが湧いてきた。この子を殺した奴を殺したい。そんな思いが湧いてきた

何んの男は、拳を作り自分の太股を殴つた。まるで、自分の復讐心を抑える様に。

「何故、その思いを抑え込もうとする?」

無精髪の男が問う。その男の目は、異常に冷たく見えた。

「どうすれど?」

何んの男は尋ねた。この思いから解放されるなら、と。

「簡単な話だ・・・越えれば良い」

その言葉の意味を理解出来る筈も無かつた。だが、その言葉の意味を不思議と、感じた。

「そりが・・・越えれば」

何んの男が立ち上がりながら言つ。どうして解つたのか、それは到底理解できない事だろう。もしかしたら、解つてなかつたのかもしない。けれども、その時の男は異常な目をしていた。

異常を異常と判断できなくなると、人は本能のまま動き出す。

越えてはいけない一線を越えると、人間は人間ではなくなる。

今、一人の男が・・・一線を越えた。

1996年 11月14日

男は探していた。ある男を。自分の娘を殺した男・・・道化師を。

道化師は、あるレストランの様な場所に居た。しかも一人では無い。

「何か頼めよ」
「結構」

道化師の目の前で、二人の男が話している。

男三人で一つのテーブルを囲んでいるのは、方から見れば少し不気味だった。

「で、ハグリス、ツイック……様な何だい？」

道化師が尋ねた。

尋ねられ、ツイックが思い出した様にテーブルに手を置き、話始める。

「はい。最近起きている事件はござ存じですか？」

ツイックが道化師を見ながら言つ。道化師はコーヒーを一口飲み、尋ね返す。

「死因が水死の奴かい？」

ツイックは、コクリと頷く。それに続き、ハグリスが喋る。

「周りに水場が無いのに、死んだ奴14人全員水死。しかも狙われているのは皆殺し屋だ。この異常さに、遂にはその殺人鬼には賞金が懸かつた」

煙草の煙を吐き、ハグリスは溜息を一つ吐いた。

「姿が解らない奴を手配人かい？」

その問いには、ツイックが答えた。

「いえ、人相や詳しい事は不明ですが、服装は何人かの目撃者が居たので、解っています」

「どんな？」

「真っ赤な服を着た男です」

その答えに、道化師は溜息を吐いた。

「まるでサンタクロースだよ」

ハグリスが煙草を消しながら言つた。

「ですが、完全にこの男は一線を越えています」

ツイックが言つ。その目を真剣だが、これはこの殺人鬼を捕まえたとか、そんな感じの正義感では無い。早く始末したいと叫び、願望の目である。

「何故これを私に？」

道化師は尋ねた。こんな事はこの島では良くある事。これをワザワザ道化師に言つ事は無い。

「それが、今朝殺された男の現場に、血で書かれたメッセージが血で・・・ますます胡散臭くなつてきた。また道化師は溜息を吐いた。

「内容は『道化師よ、貴様の命を潰そう』と、貴方に宛てたメッセージです。この男、何か知つているのでは？」

ツイックが尋ねる。

だが、道化師は疑問を抱いていた。何故、こんなまじめにじこや

り方をする必要があるのか。

「んで、アンタの所に来たって事だ。アンタの事だからその犯人も直ぐに分かると思うが、一応な・・・」

ハグリスがまた新たな煙草に火を点ける。だが、ツイックが間髪入れずにツッコむ。

「別に貴方は来なくて良かつたんですけどね・・・。たまたま会付いて来ただけでしょ？」

「なにい？』

ハグリスがツイックにメンチを斬る。

「解った。この事は私が」

そう言つて道化師は立ち上がつた。そして、自分の飲んだ分のお金をテーブルの上に置く。

「それでは」

そう言い、道化師は去つて行く。

ハグリスとツイックはそのままメンチを斬り合つていた。

見つけた・・・見つけたぞ・・・。道化師・・・お前はこの手で・
・・。

その日、道化師は貸しホテルには帰らなかつた。

裏路地。第一の死体が発見された場所に居た。

道化師は考えていた。この殺しの意味を。そして、この男は何かしらの出来事で自分と絡んでいると。

気配がした。誰かがこちらを見ている気配。

「誰だい？」こんな時間に

道化師は空を見上げながら問つ。

「くつくつくつ……会いたかったよ……道化師」

不気味で気味の悪い笑い声。

道化師は目を細めて、舌づちをした。

最悪だ……。この感じは完全に泥沼の中だ……。

道化師は気付いた。自分が今、相手のテリトリーの中に居る事を。テリトリーの中に入つても、道化師は気付かなかつた。それに対しうの苛立ち。

それと、自分を狙つている奴が、正当な理由を持つてゐる事に対し

ての嫌悪感だった。

「貴様・・・私の知つている奴の仲間か？家族か？」

「この道化師の問いに、殺人鬼の男は言葉を無くした。気付いている。だが、やる事に変わりは無い。」

「答える気は無い。お前は・・・ここで死ぬのだから――！」

道化師は鼻で笑う。

「フンッ！ベタな言葉だな」

「言つてろ――！」

その言葉と同時に、道化師の身体は水に包まれた。これが、他の奴を殺した力と言つたところか。

道化師は一瞬目を瞑り、そして開いた。その瞬間、道化師は姿を消した。

「何ッ！？」

殺人鬼は、当たりを見渡した。そして、走る一人の男を見つけた。

「逃がさん――！」

殺人鬼は走り出した。逃げる道化師を追い。

真っ赤なサンタは、道化師を漬す。 前編（後書き）

書き方を変えた。

若干読みづらいからである。もし、この書き方の方が読みづらいのなら、言って下さい。

ええー今日は何でしょう、あまり書く事がないです。

書くとしたら、いつもよりバトルが長いです。そして、次はある意味衝撃です。道化師の見方を少し変えます。（笑）

ありがとうございました。

次もよろしくお願ひします。

真っ赤なサンタは、道化師を漬す。

後編（前書き）

真実は心を壊し。過去をも壊す。

真っ赤なサンタは、道化師を漬す。 後編

厄介だな・・・。なかなかの力を持っている。

道化師は走りながら、この状況の打開策を考えていた。

本気を出せば簡単に事は済むが、それは道化師にもこの島にもメリットは無い。

一瞬で消すのは容易いが、あの殺人鬼の事は解らずしまいになってしまつ。

それに、本気は脳に悪い。

道化師は走りながら考えた。

ふと、思い出した。

「気は乗らないが・・・」

道化師はメイン通りから、裏路地に入つた。

「逃げられるものか!」

建物の上から道化師を見る。

殺人鬼は、完璧に道化師を捉えていた。

フン・・・。

もう、この時点では殺人鬼は余裕だった。

「裏路地に入つたか・・・愚かな・・・」

殺人鬼は道化師を追い、裏路地に入つた。

そこで、殺人鬼は自分のミス・・・いや、油断に気付いた。

「なつ・?・どこに行つた!・?」

見失つた。一瞬で。簡単に。

殺人鬼は自分の拳で壁を殴つた。

余裕など見せず、直ぐに殺れば良かつた・・・。

「どうしたの?おじさん・・・」

俯いていた顔を上げ、前を見た。そこには、綺麗な赤い髪をした女が立つていた。

「いや・・・君こそ・・・」

あまりの美しさに言葉が詰まる。

女は一コリと笑い、殺人鬼に近づく。

!?

殺人鬼は後ろに跳んだ。

「どうしたの？おじさん」

女は不思議そうに首を傾げる。

たが
も、その演技は殺人鬼には效かなかつた

危なかつたよ。貴様の身体が濡れてなけれは死んでいた」

女の髪を濡れていて、晒す肌も微かに濡れている。

ふふ・・・思つたより冷静なのね・・・

女が不敵に微笑む。

道化師　・　・　貴様に女装の趣味があるとはな

女の事を道化師と言つ殺人鬼。
だが、女を見ても男が変装してい
る様に見えない。

「どうしてこんなんだ？」

殺人鬼は尋ねる。

「どうして……女にそんな事を聞くの？」

口調も声も完全に女。濡れてさえなければ、気付かなかつただろ
う。

「まあ～ 一つ言つとくけど、これは変装と言つよりも、変身と言つ
た方が良いかもしねないわ」

髪を弄りながら、女の姿になつた道化師は言つ。

「ピエロよりも、マジシャンだな」

殺人鬼が笑う。それを聞き、道化師も笑つた。

「ホントね・・・。でも、この姿の時は道化師と呼んで欲しくない
わ」

そう言い、道化師は自分の唇を触つた。

妖艶な、姿。

一瞬、殺人鬼は生唾を飲んだ。だが、直ぐに我に帰る。

「レーレ・・・レーレ＝シソラと呼んで欲しいわね・・・」

レーレ＝シソラ。道化師が殺した女。そして、道化師と永遠を望
んだ女。

道化師の今の姿は《トゥー・リップ》と同じだつた。
ただ、口調が少し違うくらいで、他は全て同じだ。

「女らしい男だ・・・」

殺人鬼が動き出す。前に、前に・・少しずつ動く。

「アンタも女の為ではないのかしら？」

道化師が尋ねる。

殺人鬼の動きが止まる。気付いているのか・・・。
これが・・・道化師か・・・。

「そうさ・・・お前が殺した女の為に、俺はお前を殺す！！！」

殺人鬼は前足を踏みこみ、凄い速さで道化師の真正面に立つ。

「死ね・・・」

殺人鬼が持っていたナイフを取りだし、道化師の胸を貫こうとした。

「ノース・・・」

ピタッ！・・・ナイフが、道化師の胸、数ミリの所で止まる。

「何故・・・？」

殺人鬼は尋ねた。

「私が殺したと言ったでしょ？私が殺した女は2人だけ。『トゥーリップ』と・・・ノース＝フリランだけ・・・」

ノース＝フリラン。この名が出た瞬間に、殺人鬼の身体は震えた。

「やはり・・・お前だつたか・・・」

震える手。その手の振動で、ナイフも揺れ、今にも道化師の胸に刺さりそうだった。

だが、道化師は微動だにせずに殺人鬼の目を見ている。

「ノースを殺したのは、私だ。彼女は自分の仕事をし、そして自分の役割と共に死んだ」

声は女とまだが、口調は男の道化師に戻っていた。

「何を言っている！ 役割？ この島でそんなものが・・・」

「彼女は『セブンズ・ツリ』の六本目だった」

道化師から、予想もしなかった言葉が聞こえた。

殺人鬼は愕然とした。そして、直ぐに信じる事が出来なかつた。

「嘘・・・だ・・・あの子が・・・そん・・・な」

声が震えている。余程ショックだつたのか・・・。
道化師は、それに止めを刺す様に、続ける。

「本当だ。彼女の役割は殺戮。殺戮を背負う者は皆、殺人衝動を抱いている。彼女はそれに負けたんだ。自分の感情を制御出来ないと解つた彼女は、新たな六本を探した。つまりは後継者だ」

殺人鬼は、予想にもしなかつた事実を突き付けられ、精神的にダメージを負つていた。

だが、道化師は続ける。

「そして、彼女は自分の代わりの六本目を見つけた。そして、彼女

の欲望・願望が溢れ出した。そして……私が殺した」

道化師が言いきると同時に、殺人鬼は道化師の胸を貫いていた。

「…………嘘だ……」

殺人鬼は現実を否定するように呟いた。

「愚かなのはお前だつたな……」

殺人鬼は道化師を見た。すると、先程までは女の姿だつたのに、今は元の男の姿に戻っていた。

「化け物め……」

殺人鬼は呟く。

その姿を、道化師は冷めた目で見つめる。そして、道化師は殺人鬼の眉間を人差し指で突いた。

その瞬間、殺人鬼は崩れる様に、その場に倒れた。涙を流しながら、苦痛に歪めた顔で。

「越えるだけでは……私は殺せない」

道化師は空を見上げた。暗い、暗い、暗い。

「まるでドブの中だ……」

1996年

11月15日

真っ赤なサンタは、道化師を漬す。 後編（後書き）

何か、R指定がどうたらと・・・これ一応R15だけじ、それぐらいいですよね？

あれ、まだそんな過激な描写はないと思うんですが・・・大丈夫ですかね？

ええー今回も後味は悪いですね。

次の話は、この話でも出てきた、ノースの話です。
何で彼女が死んだのかと、そして何故道化師が殺したのかと・・・
そんな事を書きたいと思います。

てか、道化師女になつたよ。

書きたいと思ってたけど、書いてみたら思つた以上に書きづらかつた。

道化師じゃなくて、ハグリスが主人公で良くね？

ここまで読んでくれてありがとうございます
次ぎもよろしくお願ひします
では・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4869j/>

無敵のPIERROT

2010年10月8日21時10分発行